

「自己デザインができる人間」をめざして

KeCoFu プロジェクト

Key Competency of Fukushima Fuzoku

～連携実践を通して見えてきたこと～



KeCoFu プロジェクトとは…

福島大学附属幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の四つの学校園が連携して、同じまなざしで子どもたちを育てていこうと考え、「附属四校園で求める人間像」を設定しました。また、そのような人間に必要な資質や能力(Key Competency)を設定しました。そして、各学校園では、以上のことを受け、教育研究を行っています。

こうした取り組みが、KeCoFuプロジェクト(Key Competency of Fukushima・Fuzoku project)です。

本パンフレットでは…

これまでわたしたちは、「四校園夏季研修会」「実践授業」の中で、校種の枠を越えて協議を重ねてきました。こうした取り組みを重ねてきたからこそ、「連携実践を通して見えてきたこと」を紹介いたします。(一部抜粋掲載)

福島大学附属四校園

本プロジェクトではぐくむ人間像とは…

福島大学附属中学校の取り組み

子どもたちは、「よくしたい!」「よくなりしたい!」という思い・願いを持っているものです。その思いや願いは、自分たちの学習班やチーム、あるいは、学級に向けられ、膨らんでいきます。そして、そこにいる子どもたち一人一人の心の中には「自分自身がよくなりしたい!」「自分自身をもっとよくしたい!」という思いが必ず存在しているのです。

子どもの思いや願いを、敏感に感じ取り、引き出したい。
 子どもの思いや願いを、もっと育てていきたい。
 子どもの思いや願いを実現させるために、私たち教師も学び続けたい。

私たちは、子どもたちの「わかるようになりたい」「できるようになりたい」という思いや願いを大切に、教科のおもしろさや学びの楽しさを味わわせながら、「**学び続ける生徒**」を育成する授業をしていきたいと考えました。そのために、教師一人一人の「**自己決定**」と「**自律性**」を重視する環境を共同研究の中に取り入れ、日々の授業を充実させようと実践研究を進めています。

附属四校園で求める人間像

「自己デザイン

附属四校園で学ぶ子ども
キー・コン

- 〈問い続ける力〉
未知のものに出会いたいと
問題を主体的に解決する力
- 〈人間関係をつくる力〉
異なる意見や他者の考えを
りを見いだし、よりよい関
- 〈自分を見つめる力〉
自分の行動や内面を振り返

ができる人間

たちにはぐくみたい
ピテンシー（資質や能力）

いう思いをもち、自らの課
受け入れ、自分とのかかわ
係を創り上げる力
り、自分らしさを自覚する力

福島大学附属幼稚園の取り組み

【研究主題】 **学びの連続性を考える～学びの物語を通して～**

【はぐくみたい資質や能力】 心の習慣としての学びの構え

- 関心を持つ ● 熱中する ● 困難や不確実なことに取り組む
- コミュニケーションする ● 責任ある行動をする

【幼児期に培うべき・将来連続させたい力】



生活・総合等での交流



安心して学べる環境の保証

生涯学び続ける人間

小・中学校

学びの意欲

幼稚園での遊び

適切な援助

- アセスメントとしての「学びの物語」
- 保護者とともに子ども一人一人の成長を見守る
- 肯定的に前向きに見つめる

学びと環境作り

- ①健康と幸福
- ②所属感
- ③貢献
- ④コミュニケーション
- ⑤探究心

福島大学附属特別支援学校の取り組み

小学部、中学部、高等部の児童生徒が、社会生活に必要な能力・態度を養い、社会参加する力を身に付けることで、人として最も基本的な「生きる力」の育成をめざしています。

【研究課題】

アセスメントを生かした 個のニーズに応える授業づくりII

【各学部が目指す児童生徒の姿】 ひとりひとりの特性に応じて・・・

【小学部】

「生き生きと意欲を持って生活する児童」

【中学部】

「自ら考えて取り組み、共に学び合い、高め合う生徒」

【高等部】

「自ら考え、判断しながら活動に取り組み、成し遂げる生徒」

附属幼・小・中の子どもたちとの交流及び共同学習をとあして、自己を見つめ、自己デザインできる人間育成の基礎作りをしています。

福島大学附属小学校の取り組み

みずみずしい、豊かな心で、身の回りの「ひと・もの・こと」に積極的にかかわる子ども。多様な価値観を認め合いながら、対象と自分との間に新しい関係を創り出す子ども。なつてみたい自分を思い描き、それに向かって一歩一歩前に歩み出す子ども。そのような子どもを求めて、本校では、以下のような研究を推進しています。

【研究主題】 **今を生き、未来を拓く子どもの育成
～子ども一人ひとりの「感じる心」「思考力」をはぐくむ～**

【求める子どもの姿】 豊かに感じ、「ひと・もの・こと」とのつながりを深め、問い続ける子ども

【はぐくみたい資質や能力（あおいの力）】

あ あゆみだす力
「ひと・もの・こと」とのつながりの中で、豊かに感じ、問いを見いだす力

お おいもとめる力
自らの見方や考え方、感じ方を大切にし、「ひと・もの・こと」とのつながりを深めながら追究し続ける力

い いみづける力
「できるようになった自分」や「まだまだな自分」を見つめ、「なつてみたい自分」に近づこうとする力

そこで、本年次は「可視化」と「話し合い」、そしてそれらを有機的につなぐ「問い」を大切にしています。

共に学ぶ・互恵性のある連携を

保育・生活科

連携実践の実際

○ 幼稚園と小学校との相互理解・共通理解

・幼稚園では望ましい発達ができるように、小学校では授業の目的が達成できるように事前に打合せをし、学びの場の環境設定をする。
・遊びの中で、子どもの思いや願いが生きるように援助・支援をする。

○ 同じ視点で子どもをみとる

・学びの物語を継続して綴ることにより子どもの成長をみとる。

○ お互いの文化を知る

・幼稚園と小学校との教育活動に対する文化の違いを理解しあう。

遊びを中心とした学び

幼稚園の園舎・園庭での交流

○ お互いに理解をしようとする

「1年生は何してるのかな」
「ぼくたちの幼稚園なのに小学生帰って！」

○ 異年齢児の協働的な学び

「いっしょに地下トンネルつくろうね」

○ 技術的なことを学び取る・教えてもらう

「おねえさんに泥だんご作りを教えてもらったの」
「ザリガニもきれいにしてあげてね」

小学校での交流

○ 小学校に対するあこがれ

「給食っておいしいね」

○ 年上の子どもとのコミュニケーション

「小学生って、いろいろなことができるんだな」

○ 学校という環境での価値ある活動

「ここは、何を勉強するお部屋かな」



連携実践を通して見えてきたこと

環境設定・適切な援助

- I 事前・事後打ち合わせの重要性
- II 子どもたちの思いや願いが生きるような環境設定
- III 幼児も児童も価値ある遊びが展開できるような援助・支援の工夫

同じ視点で子どもをみとる

- I 記録をとることの重要性
- II 援助や支援の情報交換
- III 長いスパンで子どもをみとっていく

「中学古典への興味関心をつなぐ小学校古典指導の在り方」

国語科

連携実践の実際

第6学年単元名「古典の読みをプロデュース」

○ 単元構想の背景にあるもの

学習指導要領の改訂に伴い、「～内容の大体を知り、音読すること」が目標の一つとなった。換言すれば、「脱・素読、意味理解を伴った音読」への移行である。この時、「内容の大体」をとらえさせるために、解説書を読ませるだけでなく、文脈を考えながら、あるいは情景を思い浮かべながら、ことばの意味や作品世界を子ども自身に思考させていきたい。

○ 単元名とそこに込められた意図

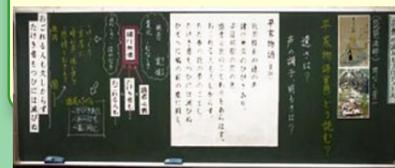
単元名「古典の読みを～」の「読み」とは、音読を意味する。人前で、一人で声を出すことに抵抗感が生まれてきている子どもたちに、「演出者」という一面、そしてそれを受けての「演技者」という両面をもたせることで、抵抗感の軽減を図る。「演出家」として、どのように読むとよいか、どのように読ませたいか、その思いを語ったり、伝えたりしていくという活動には、豊かな学習内容が含まれている。

○ 授業の概要

- ・改善の余地がある自分たちの音読を聞かせることで違和感を引き出す。そして、「もっと平家物語の冒頭部分の雰囲気を出したい」という思いを喚起し、どうしたらよいかという本時の問いを見いだせるようにする。
- ・どう音読したら雰囲気が出るようになるか、あるいは伝わるようになるかを、「諸行無常」「盛者必衰」などのことばから推論させることで、『平家物語(冒頭)』の世界観に迫れるようにする。
- ・確かな考えと音読への思いをもって話し合いに参加できるように、話し合いの前には、必ず一人ひとりに考えをノートに書かせるようにする。

【授業の成果】

- スムーズに「問い」が引き出されており、「平家物語の冒頭部分、どう読む？」という「問い」が、子ども一人ひとりのものになっていた。
- 音読する時の速さや声の調子、明るさなどを一人ひとりが決めており、自らの課題を主体的に解決しようとしていた。
また、小集団での話し合いでは、他者の考えに真摯に耳を傾けており、KeCoFuではぐくみたい資質・能力に接近している子どもの姿が多く見られた。



【授業を参観して】

- 古典における類推の思考は、「登場人物や作者の思いなどを想像すること」という中学2年の目標にふれる。小学校でここまでやってしまうと、中学校では何をすればよいのかという印象をもつ。(研究協力者より)
- 四校園夏季研修会でも話題になったが、小学校で高度な内容を行うと、中学校ではどうすればよいのかと思ってしまう。だからこそ、連携が必要になる。(中学校より)
- 小学校での取り組みは、中学校での古典指導にスムーズに移行できるという点で、非常に有意義である。(中学校より)

【授業者の見解】

- 文法や古語の習得など、より深く古典を読み深める学習は、中学校以降に行うものである。しかし、子どもたちの知的好奇心や向上心に応えようとする時、中学校での指導内容にふれざるを得ない場面が出てくる可能性は高い。
- 小学校高学年での古典指導は、中学2年の目標と重なる部分がある。学習指導要領において、小学校高学年と中学校との間には、中学3年間程の明確な系統性が見られないのも事実である。
- 古典を学ぶよさや意義、古典そのものの楽しさを感じさせて、中学校へ送り出すことが、小学校の古典指導では大切であると考えている。
その意味で、子どもが古典を嫌いにならないければ、指導内容は柔軟なものであってよいと考える。

連携実践を通して見えてきたこと

◎小・中間における国語科の学び方や学習内容の共有化・情報伝達の必要性

国語科の学びは、各領域ごとにスパイラルに展開していくため、小学校と中学校での学びにはどうしても重複する面が出てきてしまう。しかし、小学校での「子どもの学びの履歴」や「学習内容・方法」を中学校へ伝達しておくことにより、不必要な重複は回避でき、より一層子どもの興味関心に応えた単元や学習内容・方法を、中学校で展開できるようになる。単元並びに授業内容の共有化をより一層図ることが、子どもたちの学びの充実につながっていく。

連携で大切にしたい「運動経験」 保健体育科・体育科

連携実践の実際

○技能を習得させるために、体で体感させる動きづくりを取り入れる。

バスケットボールは、素早い動きが必要であり、瞬時に変わる状況の変化に対応するためにも、体を止める動作、動きを繰り返す動作、パスをミスなく出したりキャッチしたりするなどの動きが大きくゲームに左右する。その動きを身につけさせるために、毎時間動きづくりの練習を入れていけば、バスケットボールに必要な動きが身に付くであろう。

【本時の動きづくり】

- ・ピボットターンでディフェンスをかわす動きづくり
- ・チェストパスをした後、ボール保持者の対角線上に移動する動きづくり



○相手にカットされずにパスをつなぎ、シュートするための方法を考え、伝え合う場を設定する。

「試しのゲーム」を通して、パスをつなぎ、シュートするための方法を考え、伝え合う場を設定した。実際に「試しのゲーム」をするチームと、そのゲームを観察するチームの2つの役割をさせ、両方の立場から意見を出し合い、シュートにつなげるための方法を検討させる。その際、2つのことを見いださせたい。

- ・ピボットターンにより、ディフェンスをかわしボールを出しやすくすること
- ・ボールを保持していないとき、ボール保持者と対角線上の位置など、パスをもらいやすい空間に移動すること

【授業づくり】

- ・小学校での学習経験を把握して授業をつくるのが大切であることを夏の研修会で確認した。
- ・小学校で経験してきているボール運動において、学習し身に付けてきたことを踏まえて授業づくりをしてきた。
- ・運動経験や体力面の情報交換が授業づくりに役立った。



【実践後の話し合い】

- ・子どもたちが話を聞く姿勢が育っていた。
- ・生徒のセットシュートなどの様子を見て、小学校で身につけたことが、どれだけ身に付いてきているかを確認できた。
- ・伝え合う場は小学校でもやっている。小中共通に実践していることが確認でき、技能面での効果が期待できる。

成果と課題 (○成果 ●課題)

○ 事前に小学校での運動経験を具体的に把握した。このことは、生徒の実態を踏まえた授業づくりの要素として重要であることがわかった。また、小中で共通実践している技能習得の仕方、学習訓練の仕方などを見いだすことができ、今後の実践で意欲や技能の向上につなげたい。

● 今回は「球技」領域において、生徒たちがどのような運動経験を積み重ねてきているかを把握し実践してきた。他の運動領域においても、具体的な運動経験や技能習得の仕方の把握に努め、互いに、このことを踏まえた授業実践や授業参観をしていくような連携をしていきたい。

● 福島大学附属中学校 福島市浜田町12-26
電話 024-534-6442 FAX 024-536-0314
<http://www.educ.fukushima-u.ac.jp/ajh/>

「人とつながる」を大切に

連携実践の実際

自己デザインができる人間

発達支援相談室 「けやき」

他校園の状況に応じた効果的なかわりを目指します。

特別なニーズを持つ
幼児・児童・生徒の支援

附属中学校

附属小学校

附属特別支援学校

附属幼稚園

交流及び共同学習

仲良くなろう!

まずは、交流から。こうりゅうかい
そして、共同学習へ。

附属小との 交流会



● 福島大学附属特別支援学校 福島市八木田字並柳71
電話 024-546-0535 FAX 024-546-5480
<http://www.fukushima-u-sh.fks.ed.jp/index.html>

連携実践に向けた四校園夏季研修会開催

附属四校園で毎年開催している「四校園夏季研修会」。2009年は8月に開催し、連携の在り方について福島大学の先生から講演をいただいたり、秋の連携実践に向けての各分科会を行ったりした。大学と附属四校園が「KeCoFu プロジェクト」の推進に向けて、共通理解を図り、思いを新たにする機会となった。

本プロジェクトではぐくむ人間像とは…

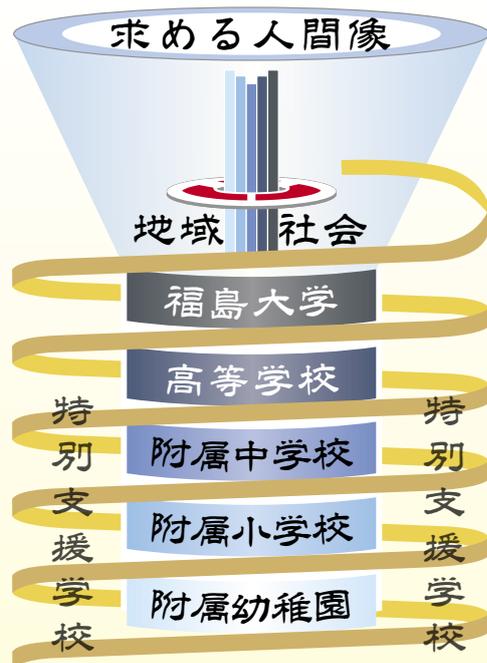
「自己デザインができる人間」とは、「自分を見つめ、自分で生き方を創っていくことができる人間」であるとわたしたちはとらえている。

《自分を見つめるとは…》

- ・この自然や社会に生きる一員として、何をすべきかを考えること
- ・自分にとって、学ぶということにどのような意味や価値があるのかを考えるということ
- ・自分のよさや可能性について考えること

《自分で生き方を創っていくとは…》

- ・「なってみたい自分」を思い描くこと
- ・その姿に向かって、自分はどのようにしたらよいのかを考え、自分で意志決定を行い、新しい一歩を踏み出すこと



〈KeCoFu プロジェクト構想図〉

プロジェクトのあゆみ

平成19年

第1回 附属四校園研究部合同会議開催

- 各校園の取り組みについて

第2、3回 附属四校園研究部合同会議開催

- 連携の必要性について

平成20年

第4回 附属四校園研究部合同会議開催(5月)

- 各校園の研究の方向性について

教育実践セミナー開催(6月)

- 幼・小・中連携カリキュラム開発について

第5回 附属四校園研究部合同会議開催(7月)

- 「附属四校園で求める人間像」とは

第6回 附属四校園研究部合同会議開催(9月)

- 附属四校園が求める人間像

「自己デザインができる人間」について

第7回 附属四校園研究部合同会議開催(10月)

- 「自己デザインができる人間」の育成と各校園の研究との関連について

平成21年

第8回 附属四校園研究部合同会議開催(2月)

- 平成21年度の研究の見通しについて

第9回 附属四校園研究部合同会議開催(6月)

- 連携実践の在り方について

附属四校園夏季研修会開催(8月)

- 各校園での連携実践の計画について

附属四校園連携実践実施(9月～2月)

- 各校園での連携実践

第10回 附属四校園研究部合同会議開催(12月)

- 各校園での連携実践のまとめについて

平成22年

第11回 附属四校園研究部合同会議開催(1月)

- 平成22年以降の研究の見通しについて

附属四校園間で、これまで以上の連携の在り方を求め、話し合いをもち続けて3年。附属四校園研究部合同会議もセミナーや研修会をはさんで11回を数えるほどになった。各校園が同じ敷地内にはない条件の下、放課後に集まり国や県の動向、大学の意向、各校園の教育目標等、様々な視点から連携の方向性を協議し、求める人間像やキーとなるコンピテンシーを設定してきた。その中で、わたしたちが何よりも大切にしてきたのは「目の前の子どもたち」であった。子どもたちの学びや育ちにとってよりよい連携とは…。

今後も、目の前の子どもたちならでは、わたしたちならではの連携の形を求めて本プロジェクトの発展に邁進していきたい。